幼児の教育　昭和62年6月1日発行（毎月1回1日発行）昭和23年4月15日第三種郵便物認可　第86巻　第6号

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1987 6

お茶の水女子大学
昭和
63.2.15
図書館

第86巻　第6号　日本幼稚園協会

子どもの遊び〈全6巻〉

0歳から6歳までの発達に応じた基本的な遊びをすてきなイラスト入りで紹介。

この本に収録した遊びは、0歳から6歳までの子どもの成長過程において、だれでもが大好きで、必ずといってよいほど通過する遊びです。また、これだけはぜひ経験させたい遊びを現場の体験を生かした保育者の目でまとめたものです。

遊びの中で何が育っているか、保育者はどんなかかわり方をすればよいか、どうしたらその遊びがさらに楽しくなるかなどについて考え直すヒントがたくさんもり込まれています。

0歳から三歳（3巻セット）

土屋多喜栄　丸尾ひさ
本吉圓子　田中文子　著
絵・浜田洋子　川上尚子　冬野いちこ

三歳から六歳（3巻セット）

本吉圓子　前典子　笠間典美
田中文子　矢作邦子　著
絵・ふじたひでみ　上條滝子　むかいながまさ

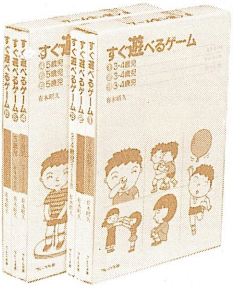
いずれもセットケース入
セット定価　各3,300円

水で遊ぶ

すぐ遊べるゲーム〈全6巻〉

あなたも遊びの名人になれます。すぐ遊べるゲームの名ガイドブック。

有木昭久・著　B5判・各200頁
定価各1,800円（3巻セットケース入り）
セット定価 各5,400円



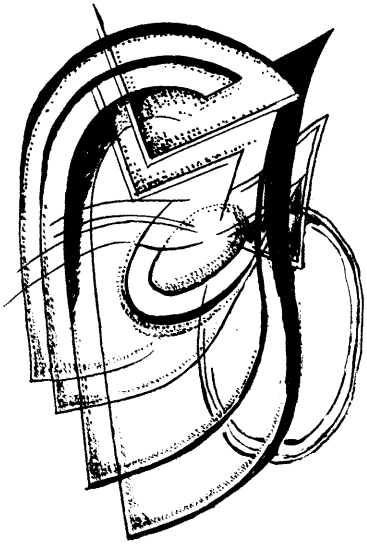
①3・4歳児（4・5・6・7月）
②3・4歳児（8・9・10・11月）
③3・4歳児（12・1・2・3月）
④5　歳　児（4・5・6・7月）
⑤5　歳　児（8・9・10・11月）
⑥5　歳　児（12・1・2・3月）

どのページを開いても、遊びがたのしいイラストで、わかりやすく紹介されています。遊びの基本型と応用の展開例があげてあり、子どもの状態に応じた指導の参考になります。子どもの好きな遊びが年齢別に選べるようになっているので、使いやすくなっています。3・4歳児の友だちづくりから、5歳児のダイナミックな遊びまで種類が豊富です。

<わしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育



第八十六巻　　第六号

幼児の教育　目次

——第八十六巻　第六号——

「幼稚園真諦」を読む
—「幼稚園教育の在り方について」と対応させて—その三……津守　真…（4）
SF的読み解き　子どもという風景
第二十六回　「正」の万華鏡……堀内　守…（14）
ふくろうのつぶやき　—間がないね—……真壁　伍郎…（24）
すべては「私」にかえる……田村　玲子…（34）

© 1987
日本幼稚園協会

兎園随筆
出会い（六）―著作集への歩み―……無木　寿江…（40）
母と子の情景
「ママ　みてて」……矢崎　淳子…（46）
女・子どもの江戸（その三）……本田　和子…（50）
若いお母さんたちへ
「文字」を覚える前に脹むもの……はるにれの会　入江　礼子…（55）

カット・福田　理恵
編集部・小澤　誉子
土屋真美子

「幼稚園真諦」を読む

―「幼稚園教育の在り方について」と対応させて―その三

津守　真

四　過程と結果――個性の産出

子どもが私の手をひいて歩いてゆくとき、その子が心に何を思っているのか、私にはまだ見えていません。その子どもと共に歩き、ゆっくりとつき合うときに、子どもは自分の思いを行動にあらわします。そのときにはじめて、子どもの心に何があったのかが、私に明瞭になります。結果は、そこに至る過程から切り離すことはできません。保育においては、とくに、その過程を一緒に過ごすところが重要です。その結果は、当然個性的になってきます。倉橋惣三は、「幼稚園真諦」の中でそのことをはっきりと述べています。第一

篇、九「幼児の個性」から次に引用します。

「心理学的に個性を認める前に、保育の結果は、当然個性的になって来ざるを得ないということであります。あらかじめその子の個性を科学的に調べて、その個性に相応するように保育していくというのは、心理学をもととして考えた言い方であり、参考とし、注意条件としては有益なことでありますが、その子その子の生活に即して保育してゆくことさえ、しっかりできていれば、おのずから個性的になるものなのであります。」

「その子の個性が、先ず心理学的に判っても判らないでも、とにかく、その子の生活にしっかり即して入って行かれれば、自然にその子の個性に行き着き、行き当ってくるのではないかと思うのであります。」

子どもの生活に即してゆけば、一斉教育には決してなれないと倉橋は言います。「今日の幼稚園は、こういう意味から考えると、どうも子どもの生活から離れてはいますまいか。いつも目的から出発して、その目的をどうして子どもに与えようかとばかりしているので、方法もそういうことから強くなる。……画一保育になるのも当然です。……教育としての考え方として、抑々順序が間違っているのではないかとさえ思うのであります」と。この本が書かれた五十年前のことだけでなく、いまも、日本の教育は同じ誤謬をくり返しているように思われます。

結果が形になってあらわれる前に、過程を丁寧に子どもと共にふんでゆくところに、保育の実際があります。そうすると、そこには子どもの個性が自らにあらわれて、それぞれ

の子どもに意味のある結果が生れます。

倉橋惣三は、「科学からのみ個性教育ができるという考えは、我々の教育の実際を余りに軽く見ている」と言います。彼は子どもに即した保育の実践をよく知っており、それに価値をおいていたことがわかります。保育の過程はおとなにとっても創造的な営みであり、子どもにとっては個性が生み出される基盤です。

「幼稚園教育の在り方について」の中で、この点にふれた部分は、Ⅳ改善の視点、―(3)「幼稚園教育は幼児一人一人の発達の特性及び個人差に応じるものであること」の項でしょう。個人差というと、量的な差異と受けとられる傾きもありますが、質的な面に着目すれば、個性と言ってもよいでしょう。幼稚園教育は子どもの個性を重んずるとの共通理解がここに示されていると言ってよいと思います。個性に対する現代の科学的認識と共に、個性を生み出す保育の過程の認識が必要であると私は考えます。

Ⅱ、教育内容について

「幼稚園教育の在り方について」の改善の視点2、教育内容では改善の視点に三つの柱が立てられています。(1)、人とのかかわりをもつ力の育成について、(2) 自然との触れ合いや身近な環境とのかかわり合いについて、(3) 基本的生活習慣・態度の形成についてです。ここでは私は、倉橋惣三の論との関連において、ほんの一、二の点を指摘するにとど

めます。

(1) 人とのかかわりをもつ力の育成について—自己の確立から他者と共同の生活の体験へ

ここで二つの重要なことにふれたいと思います。第一は、他者と交わるのには自分自身（自我）の形成がまずなされねばならないこと、第二は、社会性の発達の度合にかかわらず、異質な他者と共同の生活を形成する体験は幼少期より必要なことです。

幼稚園は集団生活だから、子どもを集団に適応させることが保育の最初の課題であるとしばしば考えられます。しかし、実際には、子どもたちの中で、ひとりで自由に遊ぶところから幼児の集団の健全な形成はなされます。自発的に活動し、自分に自信がついてくると、他の子どもと交わることも容易になってゆきます。先生の眼に、集団だけが見えていて、個としての子どものひとりひとりが見えていないときには、それぞれの子どもに必要なことが見逃されるのみでなく、幼児の集団のダイナミクスを生かすこともできなくなるでしょう。「幼稚園真諦」では、この点について次のように述べられます。

「今日の幼稚園では組から分団へ、分団から個へ、という順に考えられている風ですが、それは明らかに逆なことです。……幼稚園の生活が幼児一人々々の自由感をもって、個の生活から始まっているとすれば、個からグループへという順序になるのが自然ではありませんか。」

たとえば共同製作では、「机の前に何人かを坐らせて『これをあなた方皆さんで作るの

ですよ。それでは仕事をどう分配しましょうかね』ということになります。どうも我々には、全体をもととして、そのわかれとして、部分を考える癖があります。……そういう意味の共同製作でなく、それぞれ個でやっていることでも、結果はそれが個々別々にならないで、全体としてまとまってくることを認めたいですね。」

教育目的論からこれを考えても、「自分のしていることは、それ一つとしては実にささやかなこととしか思えないが、それが全体の中に入っていくことを喜ぶのです。それも全体の中を受持っているからこそ働き甲斐があるといったような高ぶった考え方でなく、一人一人が寄り合っていたら、全体がこうなって来たという喜びでありたいのです。……幼稚園は全体主義生活体ではありません。」（第三篇、三、個　分団　組）

この書物が、戦争へと日本が歩みはじめ、全体主義がすでに国の理念となりつつあった、昭和九年に出版されたことを考えると、この文章は私には驚くべきものに思えます。民主的な社会であるはずの現在において、教育のこととなると、全体主義的な考えが通用するのはどういうことなのかと思います。いろいろの角度から、今後研究すべき課題です。

自分の活動を全体の中に位置づけることによってはじめてその意味を見出すのは、「高ぶった考え」と倉橋は指摘します。あることをすること自体がよろこびであるのが幼児の活動です。自分が心ゆくまで遊んだ体験のある子どもは、他人の活動に対しても、他人の立場から共感することができます。それが寄り集まって、全体がつくり上げられます。こ

のことは机上の空論ではなく、保育の実際において、私共が体験していることです。幼児の集団にはこのようなダイナミクスがあります。

第二の点について。幼稚園では、個人の社会性の発達を目標とするのでは不十分で、いろいろの子どもと一緒に生活してたのしいという体験をすることがたいせつなのだと考えます。

以前に、私は、社会性の発達を個人の能力の観点からだけ考えていたことがありました。そう考えると競争原理の教育の中では、社会性の発達すらも、他人より優れるための属性とみなされてしまいます。

幼いときから必要なのは、違った人たちが、違ったままで一緒に生活してよかったという体験です。社会性のある子ども、社会性のない子ども、ともに共同の生活をつくる体験です。子どもたちの間には葛藤がたえずあるし、おとなも緊張感の中に立たされますから、それは実際には容易ではありません。けれども、ある子どもたちを排除し、同質の子どもたちだけの集団の中で生活していたら、人は心の狭い人間になってしまうのではないでしょうか。このことは、西欧の教育がこの四十年間に克服しようとして大きな努力を払い、いまでもなお戦っている問題です。この点で日本の教育は著しく遅れています。日本の子どもたちが、西欧の学校にいったときにはじきに馴れるのに、日本の学校に帰ってきたときに困難が多いのも、このことにかかわります。

自分とは違った育ち方をし、文化の基盤も異る子どもたちと共同の生活をつくる体験

は、いわゆる特殊な子どもをいれている幼稚園、学校だけの問題ではありません。どの子どももそれぞれに異質であることを考えれば、教育実践の本質にかかわる問題でもあります。

そして、現代の世界の幼児教育を考えると、日本ほど同質の子どもたちだけで構成されているところは少ないと思います。どこの国でも、移民の問題があり、少数民族、異言語の子どもたちが一緒に生活することはあたりまえになってきています。その中に、障害をもった子どもの問題もふくまれます。幼いときから、自分とは違った子どもたちと一緒に生活することによって、互いに他者を尊敬し、理解しあってひとつの世界を形成する仕方を学ぶのだと思います。このことは、五十年前にはまだ切実な問題ではなかったことで、現代においては、日本の社会の対立にもかかわる現実的な課題です。幼児自身はいろいろな子どもと自然に交わりますが、困難なのはむしろおとなの方です。異質な文化の子どもや親を含めて、幼稚園や学校の共同体を形成することは、私共日本人にとっては、実際問題としてむつかしいことです。そしておとながそのような場をつくらなければ、子どもはその社会的体験をすることなしにすぎてしまいます。

(2) 自然との直接の体験

これは、ルソー、ペスタロッチ、フレーベル以来の教育改革者たちが強調したことでした。科学技術の進歩した現代においても、人間の観点から、その重要性はかわりませんが、ここでは省略することにします。(スイスのルソー研究所の創設者クラパレードから

説きおこしたデュパルクの論説「子どもと共に歩む発見と驚きの道」―現代保育33巻11号、チャイルド社――は、ルソーの時代と現代とをつなげて分り易く述べています。）

(3) 基本的生活習慣・態度の形成について――健康で幸福な生活の体験

学校教育法では、「健康安全で、幸福な生活のために必要な、日常生活の習慣を養い」と述べられています。基本的生活習慣・態度の形成は、健康で幸福な生活のために必要なのだという考え方です。

倉橋惣三は、「学校教育法における幼稚園」の中で、この部分の解説をし、幸福な生活とは何かということに言及しています。その幸福の考え方によって生活習慣に対する考えもかわってくるので、とくにこの点を引用したいと思います。彼は幸福には、ハッピネス（Happiness）とウェルビーイング（Wellbeing）と二つの意味があると言います。

「金が人生を幸福にし、成功が幸福にし、何か外の物が幸福の原因になっている（のをハッピネスと云う。）しかしここでいう幸福はそうではない。」「此処で云う幸福はウェルビーイングに相当する。幼児をあるがままの生活に置こうとする我々には、ハッピーの幸福はしつこすぎる。ウェルビーイングには……道徳的ひびきは含まれていない。……自分を幸福にする物があるかどうかでなく、自分がいかにウェルの状態にあるかということである。……いわばのびのびと、『いい気持』のしている生活である……幼児の不機嫌なのは、本来的にウェルビーイングの生活習慣を欠いているのである。」

ここには根本的洞察があります。日本が経済復興をすると共に、私共はハッピネスにと

らわれて、ウェルビーイングを失ってきているように思います。そのことが教育にも反映されます。

生活習慣は、毎日を気持よい状態で過すのに伴うことと考えれば、無理なしつけをすることもなくなるでしょう。気持よく日々を過せれば、日常の生活習慣もついてくるでしょう。また、食事、排泄、身辺の生活習慣のことは、機械的習慣づけによってなされるのではなく、人格形成のダイナミクスの全体にかかわることです。ここには幼児期に独自の興味深い専門的課題が多く含まれています。

保育の実際面からいえば、先生との関係はここでも重要です。倉橋は次のように述べます。「幼稚園にきて、また昨日のように叱られはしないかと思う。先生において安全感をもちえないのである。……幼児が幼稚園にくるあては教えて下さる先生でなく、安全感を与えて下さる先生である。そこに人間への信頼についての喜びのウェルビーイングの癖をつけられるのである。」と。生活習慣の形成には、この人と一緒にいると気持がよいというおとなの存在が必要です。

このような意味で健康で幸福な生活の体験は、幼児の毎日の生活を形成する上で重要です。

むすび

「幼稚園真諦」（昭和二十八年再刊）の末尾に、「終りに」という文章があります。その最

後の部分に次のように記されています。

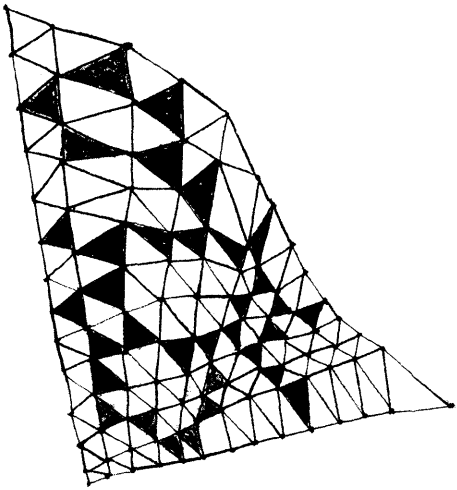
「世のすべてのほんとうの道は、あたりまえの道である。すなわち、本書の語るところ、学問の説を藉りず、学者の言を引かず、ひたすら、人間常識と幼児生活の尊重との間に、当然の保育道を見出したに過ぎない。近頃宣伝される新保育でも、輸入保育でもない。」

この書物がいまもなお保育の指針として生きているのは、理論が先行するのではなく、保育という人間の営みそのものを語ろうとしているからだと思います。ここでは、昭和二十二年の「学校教育法における幼稚園」を合わせて引用しましたが、敗戦後の日本の教育の新しい出発の原点も、この「あたりまえの道」に立つところにありました。それから四十年を経て、この世界的変化の時代に向うときにも、人間を育てる「あたりまえの道」に立って歩みつづけることこそが、次の時代をつくる力になるのだと思います。

最初に述べたように、「幼稚園教育の在り方について」は、公的機関でつくられた報告書です。半世紀以上前に書かれた倉橋惣三の「幼稚園真諦」とは、その成立において関係がないのは当然ですが、いずれも幼児教育とは何かという根本問題を問い、いかなる理論にもよらず、保育という人間のあたりまえの営みを重視する点で共通であると私は考えます。

私の個人の観点から、両者を照合しながら述べた次第です。

（愛育養護学校）



SF的読み解き
子どもという風景

第二十六回　「正」の万華鏡

堀内　守

正の字

「正の字」は、子どもの世界に無理なく入ってくる。ある年齢に達すると、その字はふつうに出会う模様に思えてくる。形は四角いし、線の並び方も規則的だ。横から眺めても、上から眺めても、よく似た形に見えるし、短かい棒を並べると、偶然「正」に近い形になったりす

る。

友だちの名前にも「正」の字がある。ある子は「正ちゃん」であり、他の子は「正ちゃん」であるかもしれない。同じ字なのに、一方は「ショウ」と読ませ、他方は「マサ」と読ませる。ふしぎである。

姓の方にも「正」はたくさんある。地名にも、屋号にも「正」がある。商品名にも「正」がある。

これらのつながりを手繰り寄せるのは子どもにとっては遊びに近い。

友だちの名前に「正」はいろいろな形をとって現われてくる。「ショウ」「マサ」はもちろんのこと、時には「タダシ」、時には「タダス」、さらに「セイ」などと変わることがあるからだ。

本当に「正ちゃん」という主人公は多い。絵本においても、マンガにおいても「正ちゃん」は、次々と現われ、やがて消えていく。そしてまた現われ続けている。

正月

子どもの観念には、「正月」はひとつのときめきとともにあらわれる。それは、「正」と「月」というように区分されない。まずもって、「正月」というときめきがあった。そのときめきが「ショウガツ」なのである。

待っている。待つことも、「ショウガツ」のイメージをふくらませる。何やらあらたまった雰囲気があり、変化があり、浮き浮きする。「正月」の「正」と、「正ちゃん」の「正」はなかなか結びつかないでいる。「正月」はみんなのものである。が、「正ちゃん」はひとりである。「正月」を「正ちゃん」に独り占めさせるなんて、というような疑問も湧く。が、子どもはそれをあえて口に出さないだろう。口に出したとたん、何かがくずれてしまうような気がする。いぶかりながら、黙っている。「正」の字がいろいろな文字と結びつくのはずっと先になる。まずは、ときめきがあったり、具体的な友の名だったりするあたりでただよっているのである。

正直

「正」の字が子どもの生活経験を揺るがしはじめるのは、それが大人の側からのきつい要求を引き連れて現れはじめるときだろう。「正直」「正座」などがそうである。

「正直」は、「正直であれ」という形だけで現われることはないだろう。まずもって、正直でない事態が生じてしまい、それに対して大人の側から「正直でなくてはいけない」という叱り、説諭などとして現れるときである。ふだんとは違った雰囲気が「正直」にはつきまとう。イミは「ウソの反対」ていどにしかわからない。にもかかわらず、尋常でない雰囲気のなかで「ショウジキ」が繰り返されていく。

「正座」は、家の構造的変化とともに変わったが、行儀正しくすわることという意味は保持し続けている。身を正しく保つということは決して楽ではない。場に馴れることも必要だが、訓練も必要になる。このあたり、子どもにとっては実にふしぎな姿勢に見えることもある。無理で、ぎごちないからだ。

「正直は一生の宝」という諺があり、他方には「正直過ぎる」というような表現もあるから、「正直一筋」にはいかない面もある。子どもだって、この機微を承知している。つまり、一方の極に「正直」があり、他の極に「嘘」があるという見方は、子どもにとっては無理なモノサシなのである。こんなにスッキリとまっ二つに分けられるものなら事はかんたんだが、そうは問屋が卸さない。

子どもの日常場面では意図せずともウソは結果として生まれざるをえない。ウソをつくつもりでないのに、大人の目にはウソのように見えることもあろう。表現が不十分であるため、または表現が誇大に見えるためだろうか。ある年齢に達するまでは、これらも大人の目には「かわいい」ことのように見えたこともあったはずである。それなのに、少しずつ事態は変わっていき、同じ行為が「正直」というモノサシで説諭を引き出すことになったりする。

にこにこ笑って見ていた大人たちも、かつてはそのことを叱ったりはしなかった。ところが、ある段階から事態は変わる。「正直であれ」と期待され、その期待に応じないと、非難を受け、ペナルティを課せられるようになるのだ。

この辺の機微は、通常、当の子ども自身にも記憶されてはいない。大半は忘れ去られてしまう。まれに、印象が強烈だったせいか、記憶に残っているというような場合もある。「聞きわけ」の良さ悪さが前面に出てくるのである。

正しい

同じ頃、「正」は少し伸びた表現に変わっていく。「正しい」という形容詞が「いい」という広汎な価直表現のなかに繰り込まれていく。流動的な世界だ。

素朴な「いいかい」「いいよ」からはじまって、概念としては「正邪」や「正否」の方に「正」が束ねられていく。

日常、あらゆる場面で、相手の許可を得る表現であるところの「もういい？」からはじまり、「もういいよ」に至る質問には、相手の「顔色を読む」ことが先行している。たぶん「もういいと言ってくれるだろう」というぐあいに頃合いを「見はからって」から、「もういいかい？」と念を押す、というのがホントのところであろう。「まだ、いけない」という答えを予想していない。

牧歌的なまでに意味の広いのが「いい子」であろう。これは「正しい」とくらべると、はるかに広い。「いい子」や「よい子」の「いい」や「よい」は、ある具体的な「子」をとらえてはいない。その子のある行為、あるいは雰囲気を指しており、さらに事実とは切り離されたお世辞やサービスという面も含むからである。

「いい子」や「よい子」は、そういうバランスの保ち方によりイミを幾通りにも変えはじめる。「もういい？」などの「いい」と違って、「いい子」の「いい」は、場合によっては清濁を合わせてしまう。「おりこうちゃん」にはあと一歩である。

答えが「正しい」というような場面は、人工的な場面において生ずる。「どちらが正しい？」とか「正しいものを一つ言え」などという問いが答えをつくり出す。「正しい」とは、ほめられたり、丸をもらったりすることと交換され、拍手や賞賛とともに方向づけがなされていく。つまり、「正しい」とは、これらのくり返しのなかで、しだいにある方向にチャンネルをつけていく。

いじわる

古典的な物語のなかでは、「正直」と対になっていたのは「嘘」よりも「いじわる」の方だった。「正直じいさん」対「いじわるじいさん」、あるいは「正直じいさん」対「いじわるばあさん」という対比は示唆的である。

正直じいさんといじわるじいさんとは何から何まで対照的かというと、そうではない。いちばん説明がなされていないのは、両者が隣り合って住んでいるという理由である。

もし、そうであるならば、「いじわるじいさん」の方が「正直じいさん」をいじめ抜き、「正直じいさん」は、その地に居られなくなるというようなことも起こりうるのだが、物語ではそんなことはない。他方、「正直じいさん」の方は、あくまで寛容である。

花咲かじじいだの、おむすびころりんだの、よく似た構造をもっている。「いじわるじいさん」は、「正直じいさん」を照らし出す光のような役割、背景の役割、ひき立て役等々である。

花咲じじいの物語では「いじわるじいさん」は、犬を借りにきたり、臼を借りにきたりする。そのたびに、正直じいさんの方はこころよく貸してやる。そのたびに悲しい目に合うのだ。このあたり、子どもにとっても納得のいかない場合も生じるのではないか。「どこまで人がよいのか」とか、「だまされるぞ」などと、応援したりする子も出てくる。もっと醒めた子は、「正直じいさん」のお人好しなことにいら立ったりする。

正方形

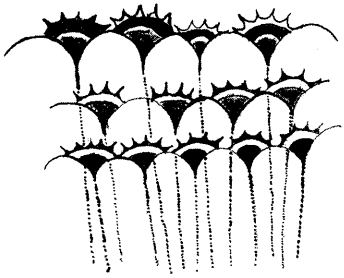
「正」という字は、形から見ると四角く見えた。四角という形のなかで、ある形のことを子どもは「ま四角」と呼ぶ。これも体験的に生まれてきた名前だ。気がついてみたら、その形のことを「ま四角」と呼んでいたというのが正直なところであろう。

ところが、同じ名前のものをこんどは「正方形」というように、あらためて呼び直さなければならなくなる。これは算数における約束事である。算数を学ばなくとも、この形を「ま四角」と呼んでいた段階から「正方形」と呼ぶようになる時期がやってくる。

これは「正」が「しょう」でも、「まさ」でもなく、「せい」であることの確認の第一歩のようなものだ。

経験的にもわかることだが、「正」にまつわる熟語のなかでは「せい」と読ませるものが圧倒的である。正史、正文、正庁、正正堂堂、正気、正色、正字、正当、正名、正攻法、正邪、正宗、正法等々。

「ま四角」は、日常用語。「正方形」は、それから先に開けていく約束事の世界を暗示する術語。



「正」と5

「正」の字画が5であることから、「正」の字は、開票の際に効力を発揮する。和算の算木に似て、「正」の字はいろいろなところで5を表示する記号として使われているのである。「正」がいくつも並ぶ。途中で開票が終わりになれば、「正」の字は完成しないまま残される。

開票をする場合、記録者は大体上方から「正」の字を書きはじめ、だんだんと下方に書き加えていく。だから、途中で開票が終わったりすると、いくつもの「正」の字が塔のように並んでいるのに、土台の方の「正」の字は未完成だったりすることもある。

「正(ただし)」くんが立候補したとする。その開票の際には黒板上で名前の部分と票数の部分は色チョークで区分しなければならないが、それにしても錯覚を起こしかねない。

選挙は、子どもの世界においてもよく行われる。その選挙は「正大」でなければならない。「正正堂堂」は、今では「選手宣誓」の場面でよく使われることばになったが、それは「正攻法」をとること、「正規」にしたがうこと、「正道」を「正義」をもって、「公正」に行くことを誓うことばでもある。

ところが、これらはよく使われる割には概念はピタリときまらない。表現は大仰なのに、イミの方は割に空疎なのである。

「正正堂堂」は、もともと隊列の勢いが盛んなさまを指すことばであった。そこから転じて、正面から悪びれずに事に当たるさまを指すようになり、態度や手段が正しくて立派なさまを指すようになったといわれている。

正三角形

「正方形」よりも、「正三角形」の方が抽象的思考に導く手段として使われる。正八面体、正二十面体などは高度な知識に連れていく。子どもは、「正門」は体験的に学ぶが、「正角形」以下は図形として定理を介して学ぶ。それは「正・反」に通じ、「正・負」に通ずる理論体系の入口あたりに位置づくだろう。

本当は「正義」などという概念は抽象的で、わかりに

くいはずである。ところが、「正義の味方」のイメージは、今日でも量産されているから、それを介して正邪も正否も体感されていく。

「正義の味方」のイメージがつくられ、子どものファンをひきつけるようになるまでには、多くの邪神、魔神、怪人、怪獣が「悪」の姿をとって現われ、「正義の味方」をひき立てている。

正調

一方、「正統」とか「正調」とか「正則」などのように、たえず他と自らを区分することをもって自分のはたらきとしているようなことばもある。

これらは、一見子どもの生活とは関係がないように見えようが、その概念を知らずとも、子どもはちゃんとこれらを演じ分けている。

端的にいえば、「正副」は、子どもにとっては身近なものである。モノやこととして身近にあるばかりではなく、これらの規準が身近にある。「これはいちばん大事なもの」「その次がこれ」というように、「正副」は価値の上で区分されている。

「正調」は、多くの変調のなかから抽出されてきたもののことである。自然発生的な場合もあるが、大方は「正調」と認められてはじめてそれを名乗ることができる。

こんなわけで、「正」の字には、ただすとか、まっすぐというようなイミがあることがわかってくる。「正」の字は、もともとは「まっすぐに歩く」意味から出発した。本来のあらたまった、正式の……というような意味はそのことから派生したわけである。

「まさ」の風景

「正」は「まさ」の一族を引き連れている。「まさに」「まさしく」などからもわかるように、たしかで、分明で、確実で……というような意味をもっている。「正土」は、床の間四壁などに塗る上等の土であるし、「正目」といえば、縦にまっすぐに通った木目のことである。

正清、正恒、正秀、正宗は、いずれも有名な刀工の名前であるが、本名というよりは、職業の格を示す名前である。だから「正」がついているのであろう。正宗は、また酒の銘柄の名前であり、酒の代名詞になることもある。

これらのことは、まさに「まさ」が「正」よりも古層にあることを暗示している。そのせいか、「正」という漢字の輸入以前の「まさ」の頻用の度合いは大きく、やたらに「まさに」を連発する人もいる。子どもにとっては、連発できるほど「まさに」は身近なことばではないが、これに応ずるのはたぶん「ホント」なのではなかろうか。

ウソ―ホントという対比の「ホント」よりも広く、「ホント」が発せられると、つぎつぎとことばが続いて紡ぎ出されてくる。そういう導き手の役割をつとめるのが「ホント」なのだろう。

分配

アリストテレスによると、「正義」は結局は「配分」に帰着するという。何やらけったいな結論のようで、高貴なはずのものが突然何かを分け合っているような光景に転じてしまったように見える。だが、まさにここがポイントなのである。ホントにそうだ。

まず身近なところから考えてみるとよい。「オーライ」「オーケー」「よーし」などは、日常気軽に使われている。軽快に。ところが、これらを文脈で分けてみると、「万事好都合」とか「万事快調」とか「健康である」というように、つつがなくすべてがそのところを得ていることを示しはじめる。

「オーライ」は「オール・ライト」、つまり「よろしい」を意味する。子どもの生活では「いいよ」とか「ホントだよ」に当たる。

ある体制が順調であり、ある状況が順調であれば、そのことばが生きている。ところが、少しでもこの調子がおかしくなると、「だめ」「いや」が生まれる。まことに変転ははげしいのである。

アリストテレスのいう「配分」は、このバランスのきわどいことを示唆しているし、万事快調のときは「すべて事もなし」という状態であることを示唆している。英語などでは、ふつうは「ライト」と呼ばれているもろもろのことがらが、少しあらたまると、ラテン語系統の「ジャスティス」に切り換えられる。

つまり「正義」である。「ライト」よりも抽象的になる。日本語風にいえば、「正しさ」に近づく。この「ジャスティス」は、ヨーロッパでは女神として彫刻や絵画に表現されているから面白い。のみならず、この女神は体軀は堂々たるもので、女丈夫のイメージがある。

よく見ると、目隠しをしており、左手に剣をもち、右手に秤(はかり)をもって高くさしあげている。「正義」は、エコヒイキをきらう。まずもって、「公平」さを示すため、目隠しをして、秤を高く掲げたのであろう。剣は邪(よこ)しまな判断を斬るためにもっていると思えば辻つまが合う。

秤や剣などの持ち物よりも、この女神のすっくと立った姿はまさに正正堂堂たるものがあり、みごとなくらい。

子どもの世界では「分配」は、まことにふしぎなくらい多様な現われ方をする。「分化」「分科」「分割」「分轄」「分光」「分合」「分散」「分冊」「分室」「分掌」「分乗」「分身」「分析」「分節」「分隊」「分担」「分団」「分段」「分捕る」「分秒」「分別」「分明」「分野」「分離」「分立」「分力」「分類」「分列」「分裂」などなど。

「正義」は、そういうなかに具体的な姿を現わす。もし現代における「正義」の女神を形象化したら、どんな姿で、何を持っている形で表わされるだろうか。

（名古屋大学）

ふくろうのつぶやき

―間がないね―

真壁　伍郎

野の花文庫の柱に、一羽の張り子のふくろうが掛っています。めがねをかけたような大きな目と、ストンと伸びた体、これが全体、この文庫のあるじのわたしにとても似ているのだそうです。一〇年以上も前に、そんなコメントをつけて、児童文学作家のいぬいとみこさんがこれをわたしにプレゼントしてくださいました。ほんとうに似ているのかなと思いながら、ギリシャでは知恵の象徴でもあるし（これがドイツではなんと、醜さの象徴！）と、いくぶん満足して、それを文庫の柱に掛けております。

昨年、この同じようなふくろうを、ドイツの学校の壁に見つけました。甥や姪たちが通っているフランクフルトのレッシング・ギムナジウムの、校庭に面したところに高だかと掛っていました。

「あのふくろうの意味知っている？」と姪に聞きましたが、分りません。わきから、この同じ学校を卒業した甥が、助太刀をしてくれました。

「知恵だよ。知恵の女神アテーナの鳥だ」

彼らは決して、醜さの象徴だなどとは考えていませんでした。ほっとしました。そこであらためて、姪に、「あなたもいい知恵がほしかったら、あの鳥のところにいって、耳を澄ましてみるといいよ」とすすめておきました。ギリシャ、ラテンの古典を重視するこの学校で、彼女はラテン語で苦労していました。

わたしも、時々、文庫のふくろうの側にいって耳を傾けます。毎週土曜日の午後、雨の日も風の日も、そして吹雪の日にもせっせと通ってくる子どもたち。その子どもたちの様子をあのふくろうは一部始終見ているはずです。いや、昼は目がよく見えないとすれば、すばらしいといわれるふくろうの耳で、子どもたちの心のささやきまでもしっかり聴き取っているにちがいありません。また、文庫のおじさん、おばさんと名乗るわたしたち夫婦の子どもたちとのいささか滑稽な対応ぶりにも、彼女（ふくろうはドイツ語では女性）は、びっくりしていることでしょう。彼女はいったい何を考え、なんといっているのか。

いつもではありませんが、時々あのふくろう、妙なことをつぶやいています。とっさになんのことだろうと判断に苦しむことがありますが、それを長いこと心に暖めていると、はっとさせられることが多いのです。

そんなわけで、わたしはこのふくろうのつぶやきを、いくらかでもご紹介しようと思います。ただ、知恵のあるふくろうですが、なにしろこれは夜の動物。白日のもとでの理性や合理だけが強調される昨今の風潮のなかでは、ふくろうの知恵など、月の光の陰影のように定かではないとおおかたのひとには退けられるかもしれません。どこにも人工照明が行きわたり、ふくろうも住みにくくなりました。

でもさいわい、子どもたちはまだこのふくろうが好きです。先日も「暗くすると、あのふくろう鳴くんだってさ」とわざと部屋を暗く閉めきって、子どもたちは息をこらしていました。そして、「ほんとだ、聞えたよ」とか、「うそだー」とかいいながら、ふくろうを見つめていました。

さて、ある日のこと、このふくろうがしきりにつぶやいているのを耳にしました。「間がないね、間がないね」といっています。

はてなんのことだろうと、わたしはしばらく考えました。そして、ようやく思いあたることがありました。

いつか子どもたちにわたしはこんなことを聞いたことがありました。

「あなたたち、どこにいるときがいちばん楽しい?」

すると、すかさず、男の子がいいました。

「うん、学校と家の間」

「うーん、そう」と、合いづちをうったものの、どうそれに言葉をついでよいか分りません。

新潟市の郊外、新興住宅地にあるわたしの家の近くには、まだところどころ畑が残っています。学校の帰り道、子どもたちは、追っかけっこをしたり、なにかがやがや話合いながら、とても楽しそうに歩いています。畑のそばにしゃがみこんで、なにかいじったり、眺めたりしている子もいます。学校と家の間、ほんとうにその子のいったとおりです。学校での緊張から開放されて、子どもたちはとてもゆったりと自分の時間を楽しんでいるようです。ぶらぶらと歩いている子どもの様子に、つい自分の子どもの頃の姿を重ね合せて見てしまいます。

学校と家の間。何気ない言葉でしたが、あまりにも意味深長です。学校が楽しいともいわず、また家が楽しいともいいませんでした。その間が楽しいのです。

ふと、わたしたちの文庫の位置づけはどうかなと考えてしまいました。間だろうか、それとも学校のようなものだろうか。家庭文庫と名のるからには、家に近いものだろうか。それにしても、あの子は家が楽しいともいいませんでした。それも気になることです。

できれば、わたしたちの文庫も学校と家の間の存在にしたい、そんな思いで、子どもたちの住む世界を見回すと、その間なるものがほとんどなくなっているのに気づかされます。

「おじさん、この文庫は塾じゃないよね」。学校で先生

がどれくらいの子どもが塾に通っているのかを調べたときのことなのでしょう。ある子どもがこんなことを聞いていました。

「あなたどう思う?」

「うん、塾じゃない。だって勉強してないし、おじさん、先生じゃないでしょう」

学校と家の間を少しでも埋め合わせようと、塾という学校がどんどん増えてゆきます。水泳でも楽しんでいるのかなと思うと、それもスイミング・スクールという学校だったりします。わたしたちの文庫には、幼稚園のときからずっと小学校六年生になるまで通いつづける子どもがけっこういます。ところが三、四年生くらいになると、学校の勉強が大変だからとさようならしてゆく子どもが毎年何人かいます。そんな子は「お母さんがこんどは塾へ行けっていうの」と、名残り惜しそうに去ってゆきます。

文庫の子どもたちは、みんな友だちどうしの口コミでやってきました。ところが、この文庫のことが新聞やテレビで紹介されると、それならわが子もと、母親の力に押し出されてくる子がたまにいます。でもそうした子どもは、まったく長続きしません。「あなたの好きな、面白そうな本を借りていきなさいよ」とわたしにいわれて、意気ようようと借りていった本に、母親が文句をいうらしいのです。返すときに子どもはぽつりといいます、「もっと字がいっぱいある本を借りてきなさいだって」

子どもたちが楽しいと感じる「間」は、親や教師の圧力からいくらか開放された、息がつける間のことのようです。教師の熱心、親の愛情が深ければ深いだけ、子どもたちとまともに向い合おうとします。勢いそのあいだの間が保てません。自分の熱心で子どもを動かし、場合によってはその熱心で子どもを変えようとします。またそれが出来るのだと信じてしまいます。恐ろしいのは、むしろその反動です。意のままにならないと、あれでもかこれでもかといろいろなことをやって子どもを追いつめ、あげくの果てにその子は駄目な子だときめつけた

り、憎しみをもったりしてしまいます。

わたしたちが科学や学問といってきたものも実は、この間をすべてふさいでしまおうとするものでした。自然科学の分野はいうにおよばず、緻密な学問とは、隙間を許さない理論をもっていることを意味しました。そしてその理論が、技術を生み、技術は専門家を生みだしました。ですから、熱意ある専門家ほど、隙間を許せなくなってしまいます。専門家だけではありません。教育の普及は、そうした理論を一般化します。いままで素人で済んだ誰かれまでが、そうした理論の実践家になってしまいます。

学校と家の間という、その家にもわたしはこうしてこだわらざるをえません。子どもにとって家庭までもが、あまり楽しいものでなくなってしまっているのです。家庭教育が叫ばれれば叫ばれるほど、母親たちは色をなして、子どもと向い合おうとします。教育のあれこれに神経を使い、子どものために間違いのない対応をと考えます。いったい家庭教育などという言葉は、いつ誰がいいだしたことなのでしょうか。家庭教育に限りません。社会教育、そして最近は生涯教育までもがいわれています。

今までの教育の図式からいえば、教育には必ず教師がいました。そのままの形が家庭や、社会や、そして生涯にわたる人生にまで延長されたら、どこかにどうしても教師に当る人を置かなくてはなりません。わが子のことで熱心になる母親（父親もいるでしょうけど、それは稀）が、家での教師の姿をとり始めたのは、ほんのごく最近のことではないかと思います。

「間違いだらけのことをしてきたけれども、子どもたちはみんなよく育ってくれた」

わたしたち七人の兄弟姉妹を育ててくれた、わたしの母はよくそんなことをいっていました。これはなにもわたしの母に限ったことではありません。たくさんの子どもを育てた母親たちの口からよく聞かれる言葉です。

親の養育の失敗にもかかわらず、子どもは育った。そのように語る親たちには、気負い立った教師や親にはな

い謙虚さをいつも感じさせられます。そのような人たちは、言葉をついでいいます。

「みんなひとさまのお蔭でした」

間違いないという教育理論、確信をもって行われるあれこれの教育方法。これが結局は子どもを追いつめ、ついには教師や親をも焦りと絶望感に陥れる。どうみてもここには間がありません。

「エラーレ・フマーヌム・エスト」

（誤りは人間の常）

習いたてのラテン語のこの言葉を、ドイツの甥が大声でいいながら遊んでいたことを思いだします。親も教師も、そして子ども自身も、だれもが間違いながら成長し、大人になってゆく。人間をこのように受けいれるゆとりと間が、今のわたしたちにはなさすぎるようです。

育つ子には、育つ親がいる。これは確かです。楽しく、しかも熱心に本が読める子は、親もたいてい読書を楽しんでいます。そんなこともあって、文庫に子どもをよこしているお母さんたちに、わたしの家で行っている大人の読書会にもよかったらどうぞとおすすめしました。すると、何人かのお母さんが来てくださいました。お母さんも自分のための勉強をし、本を読もうとしている。これが子どもたちにはとても嬉しいのでしょう。あるお母さんがいっておられました。「その日になると、子どもたちが夕ごはんの手伝いをしてくれます。後かたつけもちゃんとして、いってらっしゃいとわたしを送り出してくれます。よっぽど嬉しいんでしょうね」

母と子が深刻に向い合うのではなく、少し離れて共学の形をとる。そんなとき子どもは、自分の母親の姿になにか誇らしい気持を感じるようです。子どもも、向い合う息苦しさから、ちょっと開放されているのかもしれません。

レバノンの詩人、ハリール・ジブラーンの『予言者』という詩の、結婚についてのところに、こうあります。

あなたがたは共に生まれ、永久（とわ）に共にある。
死の白い翼が二人の日々を散らすときも
その時もなお共にある。
そう、神の沈黙の記憶の中で共にあるのだ。
でも共にありながら、互いに隙間をおき、
二人の間に天の風を踊らせておきなさい。

あなたがた二人はたしかにいつまでも共にある。しかし、その共にあるそこに、スペースを置きなさいといいます。

But let there be spaces in your together-ness

結婚についての詩でありながら、ここには親子の関係、またわたしたちすべての人間関係にあてはまる真理が語られています。ではなぜ、スペースをおく必要があるのか。詩人は、さらにつづけていっています。

And let the winds of the heavens dance between you.

それは、天の風があなたがたの間を踊るためだと。目に見えない天の風が、二人の魂の間を自由に踊り、二人をそれぞれ生かし、育てるというのです。

さて、今わたしたちに欠けている最大のものは何か。それは、天の風を信じることが出来なくなったことだろうと思います。人と人との関係を線で結び、その間が近ければ近いほど、働きかける力の作用は大きいとわたしたちは考えます。現在の科学も技術もそれを支持します。ですから、二つのものの間には、えたいの知れない空間があってはならないのです。でも、そこにはもう天の風が吹き、働きかける余地はありません。

最近、ユング心理学のことがしきりにいわれ、これに関心を寄せる人が多くなりました。今までの心理学とは一味違います。その一番大きなところは、ジブラーンのいうスペースと天の風を重視していることではないかと思います。原因結果の直線的な線引きにあけくれした学問に、間をおいて、そこに働く見えない力があることをこの心理学はいいます。隙間をうめることが今までの学

問の態度であったのに対して、むしろ隙間を大切にしようとします。いや、見方によっては、隙間だらけの学問、隙間そのものの学問だといえるほどです。それなのに、人々はいま、このような学問を喜んで受け入れようとしています。それを学んで、息抜きができ、心と魂の自由な動きを喜ぶことができるからだろうと思います。

子どもと向い合う、しかも愛情をもって向い合う。いかにもうるわしそうなこの場面も、状況によっては、子どもに有無をいわせない圧力を感じさせる場になってしまうとわたしは語ってきました。建前としての学校や家庭、そして教師だから、親だからという押し付け。これは、わたしたちが心しないとすぐにでも出てくる恐ろしいわたしたち自身の姿です。

子どものころよく聞かされた越後の昔話があります。三枚のお札の話です。ご存知のかたも多いだろうと思います。あらすじをご紹介しましょう。

ある小僧さんが和尚さんにいいつけられて、山へ花を取りに行きます。花を取り取りだんだん山奥まで入ってしまいます。気がついてみるともうあたりは暗くなっています。どうしようと思っていると、向うのほうに明りが、てかんてかんと見えます。ああよかったと行ってみると、それはおにばばの家でした。小僧さんはおっかなくなりましたが、逃げて帰るわけにはいきません。おにばばに抱かれて寝ることになります。おにばばは、この小僧さんが可愛くて、どこから食べようかと、なでまわします。

小僧さんはおっかなくなって、便所へやってくれといいます。いや、ここにしろ、とおにばばにいわれますが、ようやく紐をつけられて便所に行くことができました。すると便所の神様が、小僧さんに三枚の札をくれました。これを投げて逃げろというのです。そして、小僧の帰りが遅いのでいらいらしたおにばばが行ってみると、小僧は逃げていました。おにばばは追っかけます。

こらまて小僧。こらまて小僧と、足の速いおにばばは

もう小僧に追いつきそうです。小僧は思いきって札を一枚投げました。大山になれ。すると小僧とおにばばの間に大きな山ができました。おにばばはそれでも、山を越えて追いかけてきます。また、手がとどきそうになりました。小僧はもう一枚の札を投げます。大川になれ。

おにばばはその川も泳いでやってきます。またつかまりそうです。最後の一枚。大火事になれと、小僧さんはそれを投げました。ぼんぼん燃える火のなか、おにばばは追っかけてきます。小僧さんはようやくお寺につきました。和尚さん、和尚さん開けてといいますが、和尚さんはなかなか出てきません。おう、いまふんどししめてなどといって、ようやく小僧さんを中に入れてくれました。

ほっとしてやれ助かったと思うまもなく、おにばばがやってきます。そして、和尚さんが見事おにばばをやっつけてくれて、小僧さんは助かるのでした。

この話を語ってくれたわたしの祖母はしみじみいうのでした。「女は業が深いからなあ」と、祖母が、語りながら何を感じていたのか、今は知る由もありません。ただ、このおにばばに女としての自分の姿を映していたことだけは確かだろうと思います。

可愛くて、可愛くて仕方がない自分の子ども。それこそ山を越えても、水を越えても、火のなかをくぐっても、追って行きたい。しかし、それはなんのためか。その子のためと思ったが、実は自分がその子を食べて自分の楽しみとしたいため。

そうしてみると三枚の札も意味深長です。投げるたびに、小僧さんとおにばばの間があく。子どもと母親の間には、どうしてもその「間」が必要なのでした。さきほどのジブラーンの詩でいえば、そこに天の風が吹く。母性愛の素晴らしさを人がいうならば、このお話はむしろ、その危険を語っている。間をあけるために、子どもが投げる三枚の札は、今でいうなら、登校拒否、家庭内暴力、自殺企図などの札とも見えます。

ここで、母親や女性の愛の恐ろしい側面を指摘するだ

けでは片手落ちだろうと思います。オニババ的愛情は、誰にでもあるからです。自分の利益を求めて子どもを追い回す者は、みなこのそしりを免れません。教師も、研究者も、子どもをえさに儲けようとする者も、みなそうです。

間がもてなくなり、天の風が信じられなくなると、わたしたちはたちまちおにばばになり、子どもをえじきにしてしまいます。

このお話の最後の場面も、わたしたちに深く考えさせてくれます。慌てることもなく、ゆっくりゆっくり出てきて小僧を迎える和尚さん。その人が、しかもこの世の雑事を扱う人ではなく、寺にいて、人々の救いのために働く人だというのも、とても印象的です。

今から六〇年前、宮沢賢治は、育ってゆく若者に向けて一つの詩を書きました。その最後、彼はこう祈ります。

……雲からも風からも
　透明な力が
　そのこどもに
　うつれ……

間をとりましょう。天の風を迎えましょう。子どもたちが幼いときから、わたしたち大人がその配慮を忘れないことです。きっと、大きな天の力が、わたしたちの思いをこえて、子どもたちの上に働いてくれます。

さて、わたしはまた、ふくろうのつぶやきを聴きに文庫の部屋へ行きます。こんどはなんといっているか。

（新潟大学医療短大）

すべては、〃私〃にかえる

田村玲子

私は昨年の4月に、自由保育という形態をとるこの幼稚園の保育者として、社会への第一歩を踏み出しました。頭の中では〃自由〃という2文字ばかりが、大きく美しく輝き「ジュウ、ジュウ」とうねりを上げながら回っていました。その時私は、人間として身に付けて行くべき生活習慣や規律や感覚などが、私がこしらえた〃自由〃というねりの外

に放り出されて行くのに気付きませんでした。けれど、このことこそが、私の保育における失敗の種となったのです。

私が4月から行って来た保育が、どこかおかしいなと漠然と気付き始めてからも、それでは何がいけなかったのか、どこで間違えたのかがはっきりとわからず、様々な価値観がからみ合う茂みの中を、かき分けかき分け歩いて来ました。そして2月のある日、私はやっと自分の失敗の種を知る糸口を見つけたのです。日本保育学会会報　第77号の村山貞雄先生の「成長中心主義と保育技術の努力」でした。その中で村山先生は『成長中心主義とは、子どもが生まれつき持っている成長の意味とその働きを尊重して、子どもをスクスクと成長させることを教育作用の中心に置こうとするものである。すなわち子どもに生まれつき自然のプログラムとして組まれている成長に対してこれを邪魔するような障害を取り去り、成長という働きが充分に行なわれるような環境を与えることを教育の主目的としている。』と述べておられます。恥かしいことに私は、3回程読んでからやっと、成長中心主義というのが、今、私の行なっている自由保育なのだとわかったのです。それほど、私の自由保育に対する理解は、無に等しかったのです。

私は『子どもが生まれつき持っている成長の意味とその働きを尊重し』ようという意識はして来ました。しかし、子どもを『成長させ』て来たでしょうか？『成長という働きが充分に行なわれるような環境を与え』て来たでしょうか？　私は、子どもが生まれつき持っている成長の意味とその働きを尊重し、壊すまいとする余り、〃私が子どもを成長さ

せ、成長のための環境を与えるのだ〃ということについて、非常に無意識だったのです。村山先生の言葉をお借りすれば『保育について受身になり』片手落ちの保育をして来てしまったのです。

そこで私がこしらえてしまった〃自由〃の意識の下でおかして来た失敗について、具体的にあげてみたいと思います。

1　子どもについて　自由とは子どものすべてを受け入れること。

○子どもたちも大分、園の生活に慣れて来た5月。○君がままごとコーナーのタンスのひき出しを全部とり出し、外ワクだけを部屋の中央に運び、その中に潜り込んだ。そばにいたA君たちも加わり、今度は外ワクを横向きにねかせて「バスだ」と入り込み、他の子どもがそれを引っ張った。――私はまず「あんな使い方をしたらタンスが壊れちゃう。困ったなあ。タンスをああいう風に使うっていうのはどうなんだろう?」と思った。けれど、友達と共に遊び、共通の楽しみを見つけたことの意味や、タンスをタンスとしてではなく、バスに見たてた発想の大切さを思い、また子どもたちがあんなに楽しそうに遊んでいるのだから…と、私は最初の疑問を胸にしまい込んで、子どもの遊びをニコニコと見ていた。

○やはり同じ頃、M君が生き生きとした表情で登園し、部屋に友達の姿を見つけると、靴を脱ぎ捨て一目散にかけ寄って、ふざけっこを始めた。――私は「あれ、靴が…」と気にしながらも、M君が靴のことを忘れてまで友達との朝の触れ合いを楽しめるように

なったことの意味を思い、またせっかく子ども同士のつながりが生まれて来たのに、私が声をかけることで、それを中断させては……と靴のことはそのままに、子どもたちの様子をうれしく眺めていた。

私は、子どもの遊びや行動の意味を尊重して行くこと、これこそが自由保育だ！と思い込み、それと並んで大切にして行くべきものを切り捨ててしまいました。けれど、どちらも大切なものだったのです。こちらを選ぶとか、あちらを切り捨てるということではなく、両方の大切なものを子どもに入れていかなければならなかったのです。

例えば、タンスをバスに見立てた発想を認めながら、〝タンスでは困ること〟を伝え、他の素材を与えてみる。また、友達とふざけたい気持ちを受けとめながら、友達と一緒に靴に気付いて片付けられるような言葉かけや関わりをしていく。これが保育者である私の役目だったのです。

2　自分自身について　自由というのだから…そのままの自分で良いのだろう。

○2月のある日、私は他の先生からの指導を受け、他のクラスに紛れこんだまま少なくなってしまった自分のクラスのブロックを集め直した。減っていることを知ってはいたが私はさして問題を感じないでいたのである。ところがブロックの数が元にもどったその日から、ブロックの回りの光景がガラッと変わったのである。数人の子どもがブロックのたくさん入ったカゴを囲んで、様々なものを作り出して行く。今までの少ないブロックからは想像もつかない程の大きなロボットやピストル、汽車など。そして1人1人

の子どもによって作られたそれは「合体しようぜ」という声と共に、更に大きく長くなって行った。昨日までとはうって変わってブロックたちがキラキラと輝いて見えた。そして私は、自分の環境設定が不充分だったために、子どもの成長に気付かず、子どもがその力を出し、広げて行く場を奪っていたことに気付かされた。

私は、私生活の中でも整理整頓が苦手で、部屋の中が雑然としていても「別に困らないし、この方がかえって落ち着くわ」などと思ってしまいます。一言でいえば、だらしがないのですが、整然とした美しさに対する意識や感覚が非常に低いのです。ところが、私がこしらえた〝自由〟の2文字は、私自身の中にも都合のいい様に入って来て、自分のマイナス面さえも「それがありのままの私なのだから……」と筋違いに自分自身を説得し、納得させてしまったのです。子どもについて、すべての状態を受け入れることを自由と思い込んだ私は、自分自身についても、そのままの状態を認めることを良し、としてしまったのです。

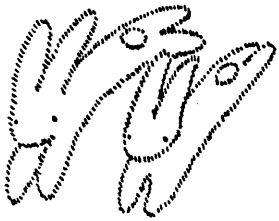
そのため、私の保育室の中は雑然とし、どこか殺伐としていました。そして恐しいことに（当然のことながら）、私が作り出した部屋の環境は目に見えない感覚的なものとして子どもに入り続けて来たのです。また、先のブロックの件で述べたように、充分な環境がないため、遊びが子どもの実際の力よりも下の段階でしか現れず、それ以上は広がらなかったのです。

クラスの環境設定や運営も各担任に任せられる、という自由保育の中で、その自由を与

えられた私たち保育者がどれだけ大切な役割を果たすのか、どれだけ責任があるのかを、実感として思い知らされました。私自身が自由であるからこそ、反対にどんな小さく細かいことをも意識していかなくてはならないのです。

今年1年間の失敗を振り返って、もう1度自由保育の〝自由〟とは何か、自由だからこそ大切なものは何なのか、それを保育の中でどう子どもたちに伝えて行くのかを、考え始めて…今、それらの問題点を解いて行くには、1つ1つの小さなものに対する感じ方、こだわり、価値観など、すべて自分自身にかえってくることを改めて思い知らされています。私が生まれてからの21年間で得て来た様々なものが、すべて保育を通して子どもに伝わってしまうのです。自分の保育を見つめるということは、そのまま自分自身を見つめるということです。私生活で部屋を雑然とさせている私が、いくら保育室だけは…とがんばってもいつかは無理が来るでしょうし、毎日のちょっとした所でいつもの雑然さは、顔を出してしまうでしょう。保育をより良く豊かにするためには、自分自身をより良く豊かにする……すなわち毎日の生活の中で、自分の持つプラス面を伸ばし、マイナス面を改良し、足りないものや新しいものを吸収していかなければならないのです。そして、それができるのは他の誰でもない、この私だけなのです。

（私自身の誤った自由のとらえ方とその影響について、自分なりに考えて来ました。諸先生方のご指導をいただければ幸いです。）（横浜学園付属元町幼稚園）



兎園随筆

出会い（六）

―著作集への歩み―

蕪木寿江

生前、周郷先生がおっしゃっておられた著作集の装丁のお願いを、東山魁夷さんに手紙を書いて依頼した。お返事がすぐ来た。「見失いがちな人間のぬくもりの感じられるお人でした。丁度、六月初めは、唐招提寺に襖絵を奉納するための忙しい最中ですので、中旬ごろに一度、お電話をしてみて戴きたく存じます」と記され、電話番号が書いてあった。

私はその日を待って電話をした。若い元気な声で、道順を教えて下さった。どなたかわ

からないその声の方に「あのおー、世間人並の御礼はとてもおだしできないのですが……」と思わず震えながら言ってしまった。「又、いらっしゃってから伺ってごらんなさい」と、言われた。この不躾な突然の言葉に驚かれた様子もなく、寧ろ、いたわられているような気がした。私はこの方の顔、姿を一瞬のうちに描いて、受話器を握ったまま何度も、「有難うございます。よろしくお伝え下さいませ」と頭を下げた。

かど創房の門馬正毅さんと、柏樹社の社長さんとお訪ねした。表札に、「東山」と書かれてあり、正木と珊瑚樹のような垣根が続き、樹々に囲まれた清楚な佇まいだった。恐る恐るインターホンを押すと、電話で聞いたことのあるあの明るい声がして、「どうぞ、お入り下さい」と言われた。しずしずと白壁に沿って格子の玄関を入った。小さな貼紙がしてあって、「制作中や、旅行のときは、お会いできないことがあります」と書かれてあった。

渋い青い色のスリッパを履き、青の世界を思わせるような落ちついた色の絨毯の応接間に通された。ガラス戸越しに見るお庭は、白樺なのか間隔をおいて控え目に立っている、という感じがした。モソモソしていると、お手伝いさんなのか、私の描いた人と同じ方が「あの電話の説明で、ここがわかりましたか？」と言われた。「ハイ、すぐわかりました。」と、救われたように口をきった。「先生はどこにお座わりになるのですか？」と伺うと、「ここですから、お庭の見えるこちら側にどうぞお座り下さい」と、にこにこして言われた。何だかとても座ってお待ちする気になれずにいると、お茶（煎茶用の小振りのお茶碗）と干菓子が、桜の花が一つ描かれてい

る懐紙にのって出された。テーブルの小さなガラスの瓶に可愛い三色すみれが数本と、もう一つの花瓶には淡い色のあじさいと、もも色のお花が押してあった。

眼鏡をかけて日本的な奥様がお見えになり、やがて東山先生がいらっしゃった。ベージュ色のシャツカラーの半袖と、少し薄めの同じ色のカーディーガンを着ておられた。ご挨拶をして頭を上げると、私をじっと見ているきれいな眼に会った。切れ長の大きな眼と、大きな耳、色つやのよい皮膚、透るまろやかな声で、「周郷さんは急に亡くなられたんですね。惜しいことをしましたね。私と周郷さんとはお会いしたのは少ないのですが、この町の先に中村さんという家があって、そこの長男の家庭教師を学生の周郷さんがしていて、私がその家（味噌問屋さん）の倉庫の二階で世話になっていた頃、交流があったのです。私が外国人の花売りのモデルを探しているのを聞いて、二十一年の二月でしたが、周郷さんが近所のロシア人を紹介して下さることになったのですが…結局は駄目だったのですが……、その婦人が『今の日本には、日本人の心が無くなってしまっている』と言っていたということを聞いて、すっかり心打たれました。」奥様とこもごも話された。周郷先生の写真を手に、懐かしそうにごらんになっていた。

お茶大を退官後の半農半学の生活*などをお話すると、「口で言っている学者は多いけれど、自らそれを実行している人は少ないのではないでしょうか、私など、とても及びません」と謙遜して話された。「先生のお勉強の部屋を瞑想の家と名づけ、そこの入口に、クレヨンで描いた世界地図の横に、『欲深い人は入ることができません』と書いてありまし

た。神の心をこの人間社会に生かして実行してゆこうと、自らに課した言葉だったのです」と続けて話した。周郷先生が東山先生を尊敬し、「僕は負けたよ」と言っておられたとつけ加えると、「周郷さんは偉い方だ、私の描いたものは祈りで、懺悔なのです」とキラキラ光る眼で話された。この東山魁夷の眼を、この生き方を、この生命を、周郷先生が愛して、ティヤールド・シャルダンの英訳〝The Heart of Matter〟には《アイシュタイン＝シャルダン＝私（周郷博）＝東山魁夷＝セザンヌ》と、自らの位置を定められようとした書き込みがあった。

紅茶とカステラが運ばれてきたが、自分がどこにいるのか時々わからなくなり、――雲の上に居るような気持もして――お話を聞くことと、最近の周郷先生を伝えたいと思うばかりで、手もつけられず、唯、渋沢の奥様がお土産にと大磯のはんぺんを包んで下さった先生の風呂敷を、テーブルの下で握りしめていた。

大きさとか紙質とか、専門的な話になった。先生が希望していらっしゃった神谷美恵子のエッセイ集（ルノール社）をお見せした。門馬さんの作った先生の詩集、「失なわれた季節を求めて」（国土社）の装丁を大変気にいって誉めていらっしゃった。八月一日から一ヶ月間、ヨーロッパにいらっしゃるので、新しく描く時間がないので、その前にして下さることになり、二十五年に描かれた「道」が選集の内容にふさわしいとおっしゃられ、一同賛成した。東山先生は一つずつ奥様に相談され、多くの画集をお持ちになり、内容を検討されておられた。奥様もご立派な方で、日本画の川崎小虎の長女であると、「旅の環」（新潮社）で読んだことを思いだした。

「超、忙しいのですが、七月に下書を作りましょう」と言って下さった。暖かさの感じられる雰囲気に、握り締めていた風呂敷をお見せし、「この風呂敷は一月十四日に、沢山の本を、（主に原書ですが）お話しようとして包んでいらっしゃった風呂敷です」と話すと、「あーこれですね、機関誌『いちがお』に書いてありましたね」と、奥様がしみじみ話された。ここでは見せまい、と思っていた涙が、ふうっと流れてきた。一時間二十分、始終静かな穏やかな言葉に包まれ、いつもの私にいつしか戻ってしまった。帰りには、ご夫妻でお玄関に正座して見送って下さり、その偉さに身が締る思いであった。

門を出てバスを待っていると、涙が堰を切ったように流れてきた。下を向いている門馬さんの肩も揺れていた。大役を果たした安堵というものでもなく、唯、「ありがたい」という思いと、「勿体ない」という思いと、そしてその底にいつもある周郷先生が……先生が生きていらっしゃったら……と思う思いに耐えられなくなった。先生は、東山魁夷が大切で、大切で、お会いできなかった。自分の為に時間を、労力を費やさせることができなかったのだ。それ程大事で、著作集の装丁もお願いできずに亡くなられた。

次の日も、次の日も東山魁夷の暖かい血が私の心の中を流れていた。その指先で子ども達に触れると、子どもの体の中に、魁夷の魂が宿るようでとても幸せだった。

この原稿を書いていると（三月七日、土曜日、二十一時少し過ぎ）三チャンネルで、東山魁夷と、中村歌右衛門の対談をやっていた。（「伝統の流れに新しい水を汲む」という題であったのは終ってから知った）私はペン

をおいて画面に見入った。

――『道』――

今、魁夷さんの家のことを原稿用紙に向って書いていたのです

あの青い絨毯のこと――

お庭の白樺のことを――

それが同時にテレビの映像になって

写っているのです

「著作集の装丁に……」と言って下さったあの『道』が、画面いっぱいにひろがってきました

私はどうしたらいいのでしょうか

ここから逃げたくなりました

先生がいつも話していた

「自然を大切にすることは

人間を大切にすること」だと

今、たった今、同じことを今、

魁夷が言ったのです

聞こえましたか――

これが「出会い」というものなのでしょうか

私は、「教育とは、人との出会いである」と

まとめようとしていました

しかし、「出会い」とは

今夜のように、偶然に訪れて

又、心の中に

一途に燃える火を

点してくれるものなのでしょうか

＊　幼児の教育86巻第4号　参照のこと

（市が尾幼稚園）

母と子の情景

「ママ　みてて」

矢崎　淳子

ゆうべの雨が上り、きょうは晴れた公園。所々に広がる水たまり。なま乾わきのすべり台。なま乾わきのブランコ。ブランコの下にも、小さな池。砂場は、ほど良く湿って、お団子を作るのに、もってこいです。

ショーちゃんの声が、叫びます。

「ママ！みてて。

いまから、すべり台するからね。」

ママは、うなずきます。

しばらくすると、またショーちゃんが叫びました。

「ママ。みてて。ボク、すべり台、じょうずでしょ。」

ママは、うなずきます。

「そうね。」

ショーちゃんの声が叫びます。
「ママ。みてて。ブランコするからね。
たちのりするからね。」
ママは、うなずきます。
すぐに、ショーちゃんの声。
「ママ、いまみてた？たちのり、じょうずでしょ」
ママは、うなずきます。
「そうね。ほんとに。」

ショーちゃんは、公園をつっきり、今度は砂場へ、行きました。
「ママ、みてて、おすなばであそぶから。」
ママは、うなずいて、後から、ゆっくりとついてきます。
「ママ、みて、ほら、おだんご。」
ママは、ふんふんと うなずきながら、砂場の横に、しゃがんで、隣のおばさんと、話を始めました。
「どうして、子供って、こう、みてて、みてって、見てて欲しがるのかしらねェ」
「全くね。ウチの子も、そうだったわァ」
ショーちゃんが、叫びます。
「ママ、いまみてなかったでしょう。
おしゃべりばっかりしちゃダメ。」
隣のおばさんが言いました。
「ショーちゃんは、ママみててが大好きね。どうして、ママが、よそを見ちゃいけないの。」
「どうしても」
ショーちゃんは、そう言って、さらに、沢山のお団子を、作り始めました。一個、作っては、ママをちらっと、見上げ、「ほら。」と、呼びます。しばらくして、ショーちゃんは、ママを見て、びっくりしました。
「ママ！」

「はい、はい、見てますよ。」
「そうじゃないの。うしろ、うしろ、うしろ見て！」
　ママは、振返りました。と、すぐ目の前に大きな水たまりが、広がっています。もう一歩、いえ、半歩、後ろに下がったら、しゃがんだママのおしりと足は、ぽちゃんと、水たまりに入ってしまう所です。
「あぁ、助かった」
　ママは、慌てて、立上ると、言いました。知らない間に、後ずさりをして、水たまりまで、来ていたようです。
　帰り道、ショーちゃんは、満足そうに、こう言いました。
「ほらね、ママ。ボクが、ママを、見ていなかったら、今ごろは、ママは、びしょ濡れになっていたでしょう。」

おきゃくさまやめた

おきゃくさまになったらね
いいこにしていてちょうだいね
おいしいおかしがでてきても
とたんに、おててはださないで
どうぞ、めしあがってっていわれたら
ぼろぼろこぼさず、たべてよね
もっとっておもっても

なんかほかにないのなんていわないで

どんなおうちか、みたくって
たんけんしたくなってもね
あちこち、あけたりしないでね
きんぎょや、えがきっとあるから
それを、じいっと、みててよね

おしっこしたくなったらね
ママが　つれていってあげるから
もどってきたら、ひとまわり
おへやのなかをぐるりみて
すぐまた、おしっこなんて、はやすぎる

ママもうかえろうとか
すぐにいったりしないでね
ママのおはなし、おわるまで

どう？　よしクン。おきゃくさま
できるかな。
できるヨ、できる　っていったけど
ママのおはなし、ながすぎる
いつになったら、おわるかな
はやく、おはなしおわらないと
また、おしっこ　いきたいよう
つまらないから、もうかえろう
ねえママ、ママったら
おきゃくさま、やめて、もうかえろう

女・子どもの江戸（その三）

本田　和子

◆　浮上する「子どもの遊び」

小さい人たちが、保護と養育の対象とされ、愛撫にふさわしい存在へと範疇化されていく動きは、この時代の様々な言説に如実に反映されている。たとえば、伝統的な宗教行事が子ども中心のそれへと変容していく動きを追ってみても、そこから、「子どものため」という教育的・啓蒙的な意味づけが日を追って濃くなっていく姿が、はっきりと浮かび上ってくるだろう。

遊びもまた、例外ではない。大人と子どもの区別なく、人間一般のものであった遊びが、分解されて「子どものもの」という囲いに入れられると、教育的な意味を探るまなざしが、俄かに活発になる。「子を捕う子捕う」という遊びをめぐる記述は、それを物語る典型的な例と言えそうである。

「子を捕う子捕う」とは、子どもたちが従につながって鬼と向き合い、鬼は列の一番後の子どもを摑まえようとし、列の先頭の子どもが親となって両手を拡げて後の子どもをかばいながら、鬼に奪われまいと逃げ廻る遊びである。最近は余り見られなくなったものの、十数年前までは、校庭や町の空地を賑わした伝統遊戯の一つであった。

この遊びは、驚くほどの文献記録に恵まれていて、現

在見出されているものでも、平安時代まで溯ることが出来るとされている。そこで、とりあえずは、その記録の幾つかを紹介することから始めよう。

◆　「子を捕う子捕う」超源譚

国文学者の佐竹昭広氏は、その最も古い現われを『作庭記』に見ている。その中に、次のような一節があるという理由である。

風石を立る事は、にぐる石一兩あれば、をふ石は七八あるべし。たとえば童部のとてう〳〵ひゝくめといふたはむれをしたるがごとし。

右の文中の「とてう〳〵ひゝくめといふたはむれ」というのが、「子を捕う子捕う」の遊びのこと。この遊びは、古くは「比比丘女（ひふくめ）」と呼ばれて、「とちょうとちょうひふくめ」などと唱えながら、遊ばれるものであったらしい。「とちょうとちょう」とは「取りてむ〳〵」の音便形。「取りてむ――取ってむ――トテム――トテウ」を変形したのであろうと考えられ、「取ろう」という意志の表明とされている。

ということで、『作庭記』の編者とされている橘俊綱（一〇二八～九四）の時代に、既にこの遊びが遊ばれていたということになる。以後、「比比丘女」の記録は、鎌倉時代の『名語記』、室町時代の『三国伝記』と続くことになるのだが、ここで、私が特に注目したいのは、『名語記』『三国伝記』に記された地蔵菩薩縁起譚のことである。その概略は、次のようであった。すなわち、地蔵菩薩が地獄から罪人を救い出して連れ帰る途中、追いかけて来た地獄の獄卒と「奪い返そう」「奪い返されまい」とわたり合った。獄卒が、「取るべし取るべし、比丘、比丘尼、云々……」と叫び、菩薩は「上を見よ、頗（は）梨鏡（りのかがみ）、下を見よ、頗梨鏡（はりのかがみ）」と訓（さと）して、罪人らを護り導いたというのである。「はりのかがみ」をよく〳〵見るなら、罪多き衆生といえども、一つぐらい善を働いている筈だから、救い出すに値いするということであろう。

この故事にちなんで、地蔵菩薩の慈悲深さを伝えるため、作り出されたのがこの遊び、すなわち「比比丘女」だということなのだ。

ことがらの真疑は、ここでは問わない。私は、子どもの遊びが、すべて信仰的な起源を持つとは考えないし、また、そのために意図的に作り出されたとも考えにくいから、恐らくは、事実ではないと思っている。しかし、鎌倉期以降、この「比比丘女伝説」が大切に伝承され、とりわけ、江戸中期以降、改めて脚光を浴びさせられて、華々しく喧伝されるその経緯に、限りなく興味を抱かされるのだ。

以前も触れたように、江戸中期以降、子どもをめぐる言説が活発化し、子どもの風俗や遊びなどが記録され、考証され始める。風俗事典や随筆の中に、「児戯」などという項目が設けられ、子どもの遊びが、しばしば絵入りで説明されているのは、その端的な証と言えよう。そして、それら記録類が、必ず取り上げた遊びの一つが、この「子を捕う子捕う」であった。中でも、山東京伝（一七六一～一八一六）の『骨董集』と題された随筆集の「比比丘女」の項は、後の諸本の範とされたという意味で、見落とすことが出来ない。それは、次のように書き出されていた。

今童遊びに、子とろ〳〵といふ事をすめり。これいと古き事なり。古へは比比丘女といへり。その原は、恵心僧都経文の意をとり、地蔵菩薩、罪人をうばひ取給ふを、獄卒取かへさんとする体をまなび、地蔵の法楽にせられしより始れりといへり。

そして、以下に『三国伝記』巻八の第二六条の「比比丘女起源説」を引用し、最後に次のような一文を付けて結んでいる。

〔割書〕かゝれば童遊びの子とろ〳〵は、此比々丘女よりいでし事なり。此書は永享三年になれるものなれば、いとふるし。永享三年より、今文化十年

まで、およそ三百八十三年なり。とにかくに童の遊びには、ふるき事のこれり。しかもその原をたづぬれば、いはれある事ぞおほかる。

京伝は、こうして、この遊びの古さと由緒正しさを強調しつつ、一柳斎に描かせた挿絵を添えることで、伝説の衝激力をより高めようと試みた。すなわち、地獄の鬼と渡り合うのは錫杖を持った地蔵菩薩、その後には白装束の亡者たちが連なり、最後尾には、髪を芥子坊主にそった幼い子どもの姿も描き込まれている。恐らくは、この図像のインパクトもあってか。京伝説は多くの好事家に継承された。近代以降の研究者たちまでも、一応は、この「比比丘女起源伝説」を無視し得ず、これをふまえてこの遊びを説明しているほどだ。そして、この、京伝以降の、より正確には『三国伝記』以降の、というべきかも知れないが、「比比丘女伝説」継承の経緯は、子どもの遊びが、人々の認識野に掬い取られて位値を与えられる際の、典型的なありようを物語る例と考えられて、限りない興味をそそられる。

◆ 地蔵菩薩と恵心僧都

「比比丘女」は、平安時代の記録に見られるように、極めて古くから遊ばれていた遊びである。これが、鎌倉・室町以降、地蔵信仰と結び付けられ、さらに、恵心僧都源信の創設とされて、一きわ、由緒ある遊びとしるしづけられた。ここに見られるのは、子どもの遊びが「意味あるもの」として意識化され、価値の文脈にのせられていくメカニズムである。

地蔵信仰が庶民の間に広まるのは、平安末期であるとされている。そして、それが、子どもと強く結び付くのは、近世以降の動きであるらしい。子ども専用の地獄として「賽の河原」が出現するのが室町後期、それが広く一般に普及するのは江戸期に入ってからであった。その「賽の河原」で、地獄の獄卒に苦しめられて泣いている亡児を、地蔵菩薩が慰め助ける。こうして、地蔵菩薩は、子どもの救世主となった。とすれば、「子を捕う子

捕う」が地蔵菩薩の御利益を伝えるというこの伝説は、江戸期の人々の心性に受け入れられやすかったことだろう。

それに加えて、山東京伝が強調したのは、恵心僧都源信との関係であった。源信は、周知のように、日本浄土教学を体系化し、その理論的指導者と目される人物である。『往生要集』に見られる彼の博識と論理性は、改めて指摘するまでもない。興味深いことに、人々の想像力は、この論理的な学問僧を、何故か子どもの遊びの創設者に仕立て上げようとする。踊り念仏の一遍でも、市井の聖たる空也でもなく……。「取るべし取るべし、比丘、比丘尼」などと叫びながら、右へ左へと走り廻る役割が、何故、源信にふさわしいのだろうか。

地獄のイメージは、源信の『往生要集』によって、鮮かなものとなった。つまり、彼は、地獄イメージの創設者。とすれば、地獄からの救済を遊戯化する役割も、彼に委ねられたのかも知れない。しかし、それにもまして、源信のような学識すぐれた名僧と結び付けることで、この遊びを、いや応なしに価値あるものへと仕立て上げる。時代の意図をも見るべきではないか。子どもに関する諸々に無関心であり得ず、彼らの遊びをも単なる遊びとして放置し得ぬ心性が、漸く、人々を支配し始めていたのではなかったろうか。

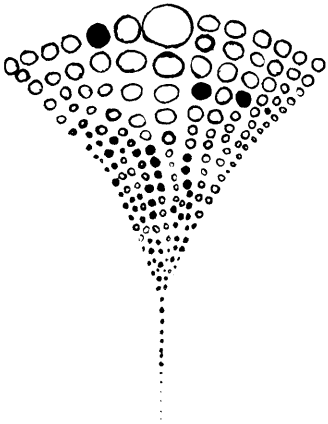
気が付いたとき、人々の身近では、子どもたちが「子を捕ろ子捕ろ」をして遊んでいた。しかも、それは、いま大人である自分たちも遊んだことがあり、久しい昔から遊び続けられてきた、時間を含みこんだ出来事のように見える。にもかかわらず、それが改めて像を結んで、鮮明な「意味づけ」を要求している。そのために、引き出されたのが、地蔵縁起であり、源信伝説であったのだ。江戸中期以降の随筆類に、くり返し顔を見せるこの「比比丘女」伝説は、こうした心性のありようを指し示して絶妙と言えよう。

（お茶の水女子大学）

若いお母さんたちへ

「文字」を覚える前に脹むもの

はるにれの会　入江礼子



二女が一日入園の日のことでした。子ども達が在園児に連れられ園内探険に出掛けている間、母親達は、幼稚園のホールで用品の受け渡しの順番を待っていました。二女は、歩いて25分程かかる区立幼稚園に通うことになったため、母親の私もこの園に入園させる母親達のどなたとも面識がありません。勢い、黙って立っていますと、あちこちから色んな会話が断片面に耳に入ってきます。その中の一つに、こんなのがありました。

「ねえ、〇〇ちゃん、もう読めるようになった？うちのはねえ、自分の名前がやっとなのよ。大丈夫かしら？」私は一瞬、自分の耳を疑ってしまいました。これが、小学校入学前に行なわれる説明会での会話ならいざ知らず、まだ四才になるかならずの子ども達の母親の口から流れ出た言葉なのですから。

母親達にとって「字」を覚えていないことが心配の種になるという現象は、年を追ってエスカレートしているように感じられます。我が家の場合、長女（小三）と長男（小一）は、一年前まで千葉で育ち、幼稚園も、よく遊ぶことを主眼においた私立幼稚園でしたので、少くとも入園時に母親達が「字」を覚えていないことで心配するというような現象は見られませんでした。けれども、そういう幼稚園を選んで入れている親でさえ、卒園間近になると、我が子が余り「字」というものに興味を持っていないと、にわかに動揺しはじめ、「やっぱり幼稚園でもう少しなんとか教えてもらっていればよかったのではないかしら」というつぶやきを漏らすようになったりしたのです。

建前の上では、「字」は小学校に入ってから学習することになっています。けれども、何とか我が子が少しでも有利に、少しでも楽に小学校生活を送れるようにと願う鬼子母神的親心は、建前はあくまでも建前であり、本音のところでは、我が子だけは何とか「字」を覚えてから学校に入って欲しいというもののようでした。

ここでは、事の是非はともかくとして、我が家の三人の子どものうちの長男の成長の跡を辿りながら、彼が、何を心の中に脹らましながら大きくなって来たかを考えてみようと思います。子ども達は、三人三様の育ち方をしていますが、「字」に対する興味という側面に限って見る限り、一番遅かったのは、この長男だったのです。私は、彼から改めて人間の成長というのは、本当に個性的（十人いれば十人違うという意味での）なものだということを学び直しました。四〜六才という幼児期の年令に「字」に対する興味がないということが、その子どもの「ひと」としての成長に何ら悪影響を与えるものでは

なく、むしろ、「字」にかかわりのない世界で、いっぱい感じ、味わうものがあり、それが、その人の人としての「根」の部分の養分になるのではないかと改めて感じさせられたのですから……。

〈エピソード〉

「ただいまっ！ねえ、見て見て、これ私が作ったんだから。結構考えちゃったのよね。でも大成功なんだ。」といつになく興奮して学校から帰って来た長女。その気配に、先に帰宅していた長男が、「どうしたの？何作ったの、あやちゃん。あっ、すごーい。これ迷路でしょ。それで朝、学校に箱持っていったのか。僕も作りたいなー。おかあちゃま、箱ちょうだい」しまった。箱か。いつもは作りたがり屋の長男のためにダンボール、空き箱等を数個は用意しておくのですが、年に一～二度おきる（一～二度しかおきないと言うべきでしょうか）私の整理願望の為、つい二～三日前、箱という箱を殆んど全部捨ててしまっていたのです。長女が箱を学校へ持って行くと言った時は、やっとのことで一つ見つけたのでした。しかしここで見つけなくては、彼はひっくり返って泣くに違いない、それだけ長男の「ものを作りたい」という気持ちは強いのです。生まれて此の方、何度こういうことでひっくり返ったことか…。というわけで階下に住んでいる義母にも協力してもらって何とか空き箱をみつけ、無事彼に手渡すことが出来ました。それから籠ること30分余り彼は、「出来たっ!!」と言って長女とは一味違った立体迷路の箱を作ったのです。

この二人は一才九ヶ月違い。更に下にもう一人、四才になる二女がいますが、上の二人は、文字通り串刺のお団子のごとく小さい時からよく遊んで育って来ました。よく遊べば遊ぶほど、二人の生まれついて持っているものの違いをまのあたりにすることも多かったわけです。この日のように作ることとなると約二才の年の差などなんのその。長男は、そこで今迄自分の培ってきたものを余すところなく発揮します。ここで長男が作ることに興

味を持ってきた経緯を簡単にみてみようと思います。長男の場合は、「作りもの」の変遷が、とりもなおさず、彼の成長の軌跡でもあるのですから…。

〈休むことのない手〉

長男の手は余り休むことがありません。必ず何かをいじっています。これは今も続いていることで、時には食事の時もコマコマとしたものをいじりながら食べるので、親としては、つい「ちゃんと食べなさい！」と声を荒げる結果になることしばしばです。

◎〇～一才代

これは世の赤ちゃんの常でしょうが、長男もやはりおもちゃ箱の中、クズカゴの中、砂場でと、ありとあらゆる場面で手を駆使していました。そして、ちょっぴり違うなと思ったのは、私が外出する時でした。生後八ヶ月のころ、親しくしていた社宅のお友達に預かってもらう時、いじるものさえあれば、そしてそれが彼にとってちょっとでも珍しいものであれば尚更、出かけて行く私には見向きもしないで背中を向けて遊んでいるということがよくありました。私は、長女が、どんなものを見せても、それにはつられず、私が出掛けることを見抜いて泣きはじめるのとは対照的だと思ったものでした。母親を他の人々と完全に見分けることが出来るようになってからも、こんな調子でした。

◎二～三才代　"おまけ"作り

二才代に入ると、おつかいに一緒に行くたびに、丁度百円ぐらいのガムやチョコ菓子についている「変身ロボット」が欲しくて、お菓子の前でひっくり返ったりしたものです。子どもにひっくり返られるというのは、親にとっては、ちょっとした試練の時でもあります。私の場合、長女の時にはそういう経験はなく、子どもにひっくり返られている母親達を見て、「気の毒に」と思うと同時に、ひょっとしたら「しつけ」が……と不遜にも思っていました。ところが同じ親が育てても、ひっくり返る子とそうでない子がいるという現実をつきつけられて、これは一体どういうことなのだろうかと考えざるを得ま

せんでした。多少自己弁護的になるかもしれませんが、長男の場合は、欲しいものがはっきりしていて絶対にこれでないと嫌だ、どうしてもこれが欲しいというものがあるからこそひっくり返るということが起ったように思うのです。二〜三才という年代が過ぎ、もうすこし訳が分ってくると、その場を納得して我慢することが出来るようになり、ひっくり返るということはなくなったのですが、欲しいものがはっきりしているという状況は変わりませんでした。

この時期、お菓子そのものよりも「変身ロボット」を家に帰って、作って遊びたいというのが彼の第一の欲求でした。お菓子は姉と分けあって食べていましたし、時には姉の方が多く食べてしまうことだってありました。食べることそのものにはそんなに執着がなかったわけです。そのかわり作りたくて作りたくてたまらないのです。しかし如何せん、二〜三才という年令が年令のため、到底一人で作ることはかないません。いくら説明書を見ても（読んでもではなく）出来ないわけです。そこで「お母ちゃま、作ってー」と相成るわけです。ここでまた私自身にちょっとした葛藤が起こります。要するに私は、手先のこうしたことが小さい時から苦手なのです。幼ない頃、月刊雑誌の付録を作ることは大嫌いで、母のところに持っていって作ってもらったり、時には四つ違いの妹が作りたがってしまうということがよくありました。私は本さえ読んでいればよかったのです。付録は文字通りオマケで、私にとってはあってもなくてもよいものでした。でも妹は違いました。雑誌が届くと、まず付録作りからやっていました。そんな妹を、随分変ったことが好きな子だと思って私は見ていたのです、ところが今度は息子がそうで、おまけに私に作ってくれと言うのですからたまりません。私は何とかそれでも良い母親たろう（？）と小さいオマケと悪戦苦闘しました。ああ、これは子どもを持たなければ絶対に触れなかった世界なのだから、一つ自分が拡がる世界を持てるようになったと思ってがんばろうと脂汗を流して取り組みました。その結果……、長男と一緒に出来た出来たと飛びあ

がることもありましたが、「ターちゃん、これは私にはちょっとむずかしすぎるわ。お父ちゃまが帰ったら残りをやってもらうから、ちょっと待ってね」と中途挫折することもしばしば。その度に彼は、今じゃなきゃいやだーっと言ってひっくり返って泣きました。そんな光景を何回繰り返したことでしょう。気がつくと、長男は、必死に説明書を睨み、ある部分は一人で組み立てられるようになりました。なにしろこなす数が多いのですから、ある程度パターン化されている部分も多いわけで、徐々に自分で出来るところが増えていったわけです。それと、いつまで経っても練習効果の見られない母親の無器用さに業を煮やしたのだろうと思います。買ってもらっては、説明書とにらめっこという日々が続きました。組みたてたものは、例えばカメラロボ（カメラロボット）の場合は、ある操作で、カメラになったりロボットになったりするので、それを持って気の合う友達と、しゃべりながら遊んだり、その勢いで外に出て遊んだりということが多くありました。オモチャの方もやはりこのおまけと同種で、もっと精巧に出来ている変身ロボットの種類（ジェットロボ、カセットロボ、タマゴラス等）を誕生日に買ってもらったり、サンタさんに持ってきてもらったりしたのです。ともかく、自分の手を加えることによって完成するものや、操作することによって変化するというところに魅かれていたようです。こういうものばかりでなく、ブロック作りもこの時期、友達とよく作って遊んでいました。いずれにせよ、自分の手でいじって変化させたりすることが彼にとって最重要のことであるようでした。

◎四〜五才代　空箱利用のロボット作り

おまけを作ることに対する興味は尽きることがなく、新型が登場する度に、それにも手を伸ばしていきました。この頃になると、もう、私に作ってくれといってくることは、殆んどなくなりました。説明書と、首っぴきで作ってしまうのです。首っぴきといっても、彼の場合は、「字」を読んで作るのではありません。「字」らしいものでわかっているのは数字だけです。これも必要に応

じて、自然に覚えてしまったようです。（私には教えた記憶がありません）それを頼りに、説明書の図の部分を穴のあくほど睨んで、それで作っていくのです。「説明書があれば大丈夫」というのが、この頃の彼の口癖でした。

幼稚園に行きはじめ、空箱や、ヤクルトの容器を自由に使わせてもらえるようになると今度は、ロボット作りが始まりました。来る日も来る日もロボットをかかえて帰ってくることが続きました。年少の後半から、年長にかけて、ことに多くみられました。作って帰ったものは、一切捨ててはいけない、とっておいて欲しいと言うので、我が家のタンスや棚の上は、彼の「作りもの」で一杯になりました。そして年長の時の年の暮れ、作ったものを写真に撮って、どうしても残しておいて欲しいというもの以外は処分したのです。彼と一緒に焼却炉に運んだのですが、その量の多さには、改めて驚いてしまいました。

この頃は、作るものの大きさが、めっきり大きくなってきたのが目につきました。ダンボールを切り刻んで、色々なものを作りはじめました。まだカッターが使えなかったので穴あけの度に、又、私の出番がまわってきました。けれどもやはりここでも、長男の方が熱心さや工夫の点で私より数段まさり、私の出番もまたそれに反比例して減っていきました。

◎六～七才代　生体メカ作り

皆さんは「生体メカゾイド」という一種の組み立て恐竜ロボットを御存知でしょうか。ゴジラに見立てたゴジュラスの他、ウルトラザウルス、マンモス等、古代に活躍した恐竜にその原型を求めた組み立てロボットなのです。大小様々、多くの種類があり、さらに子ども達のいう「いいもの」と「わるもの」に分かれているのです。これこそ、長男の今迄の「作りもの」の総決算といえるほどの魅力を備えたものでした。まず自分の手で組みたてるものであり、彼が心ひかれている恐竜達を模したものであるということ。組み立て後は、電池或は、ゼンマイの力で動くということ。そして、それらを使って数人

で遊ぶことが出来るということ。こんな魅力ある条件を満たしているものですから、第一号のゴジュラス製作からそのとりことなりました。ゴジュラスだけは、まだ一人では出来ず、姉ではなく、姉の友人の当時二年生の女の子と、やはり半日がかりで挑戦したのです。結果、一部動かないところが出たものの、それは父親の夜の努力によって補われ、翌日には遂に完成しました。手足を動かし、火を噴くがごとく口の中を赤く点滅させるゴジュラス。それは長男ならずとも、ちょっとした感動シーンでありました。ここまで来るのに、何度じれて泣いたことか……。そしてその後は、こういう大物も、説明書さえあれば自力で作れるようになったのです。このころ（年長組のころ）でさえ、説明書は、やはりじっと睨むためのものでした。それでも作ることは可能なのです。ですから彼にとって説明書は本当に大切なものなのです。我が家には、手垢にまみれ、ボロボロになったそれらが、幾つもころがっています。

さて、少々長々と、長男の「休むことのない手」について述べてきましたが、彼はこうして、大方の子ども達が「字」に対して興味を向ける時期にも、手を動かしたり、体を動かしたりする方（ここには書きませんでしたが）に大部分の時間を費していました。時々「字」を見てはいたので、いくらか読めたりはしましたが、学校に入ってからも、ロボット読みといわれるタドタドしい読み方が続いていました。

それでは、彼は果たして、学校生活で躓いたでしょうか。答えは否です。確かに「読む」ということだけを切り離してとり出せば、まだまだの要素はいっぱいあるということになります。けれども、手をいっぱい動かしていたということは、ものごとをあちこちから見たり考えたりする力につながっていったように思えます。平面的に考えるのではなく、立体的にものを捉える感覚とでもいったらよいでしょうか。言われたことをそのまま丸呑みにするのではなく、自分の手にとって捉えなおす力とでも言えるもの。卑近な例でいえば時間を逆算して考え

るということが自然に出来たり、数字が単に数字ではなく、かたまりとして考える力があったり、あちこちから見て考えるので、皆がごまかされても、簡単な手品のトリックを見破ったりと、いくらでも挙げられます。私などは、むしろ直線的、平面的思考をする部類の人間なので、そういう彼の感覚に、いくらか驚きの眼をもってみてしまうのです。文字化されない様々の経験は深い体験として、根付くように思われてなりません。いつの日か、これが、抽象化の一歩としての文字に結びついた時、本当に裏付けある力として芽が出てくると思えてならないのです。本を読んでもらうことは大好きな長男。ここでも文字を覚えるのが遅かったゆえに、聞いて楽しむ世界を堪能しています。

親はとかく、早く「字」の世界、形の見える世界に子どもを追いやりがちです。特に、学校という社会に入ることが目の前にぶらさがってくると、余計そうさせがちです。前にも述べたように、親のあせりが、加速度的に強まってきて、子ども達は、より低い年令で形ある世界に追いやられて行きます。形ない世界をじっくりと味わい、ふくらます以前に……。もちろん、個人差があることは前にも述べた通りですが、長男のようなタイプの子どもに、早く早くと「字」をおしつけてしまうことは、無意味だと思うのです。子どもが自らやりたいことがあるのなら、少々大変でもそちらを大事にすることがやはり必要だと思います。私の場合も、この長男と共に歩む（時には、添いきれないこともありましたが）ことで、はっきりと気付かされたように思います。大人の目には見えなくとも、脹んでいるものは、いっぱいあるのですから。

一般的には、男の子に多く見受けられるこのタイプの子ども達が、ある幼ない時期に焦点をあてて、そこで切って評価されるのではなく、もっと長いサイクルで成長を見守って欲しいと、親や接する先生方に願わずにはいられません。

友人と買い物に出かけた時のことです。ファッションブティックにはいりました。店内は、すでに春夏物が飾られ、明るい色があふれていました。私達より先に、幼稚園児をつれた女性が、やはり友達同士なのでしょう、あれこれと洋服を手にとり「今年は、これが着たいわ」などと、大きな声で話しています。中でも気に入ったものがあったらしく、一人の女性が、試着室へとはいりました。残った女性は、次に自分も着るものを真剣な面持ちで探しています。

その間、二人の幼稚園児は、退屈したのでしょうか、店内を走りまわり始めました。また、ディスプレーされているアクセサリーに手をのばし始めました。

その様子に気づいた試着室の中の女性が、あたりに響きわたる声で、

「静かにしなさい！」

と、どなります。一瞬、動作を止めた子供たち。しかし、またすぐに、前と同じように走りまわり始めました。何度となく、お母さんが試着室からどなる。子供たちが動作を止め、また動きまわる。それをくり返しました。子供達のそばにいるもう一人の女性も、その毎に「静かにしなさい」とまるで、その声に合わせるように言っています。

店員は、私達の相手をしながらも、子供のことが気になるのでしょう。心ここにあらずという感じで、目が神経質そうに、子供の姿をチラチラと追っています。

しばらくして、試着室の中から出てきた女性は、店員に「これ少し小さいわ」といって、服をわたしました。サイズ13はありそうなりっぱな体格。その店には、サイズ9しかないのです。

私達が、店を出かかると、店員が出口までやってきて「申しわけありません」と深々とおじぎをしました。きっと、その日は、若い店員にとって、とても疲れる一日になったことでしょう。

幼児の教育　第八十六巻 第六号
六月号　©　定価 四〇〇円
昭和六十二年五月二十五日　印刷
昭和六十二年六月　一　日　発行
編集兼発行人　東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
本　田　和　子
発行所　東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
日本幼稚園協会
印刷所　東京都港区三田五ノ一二ノ一
図書印刷株式会社
発売所　東京都千代田区神田小川町三ノ一
株式会社　フレーベル館
振替口座東京九一一九六四〇番
⊙本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

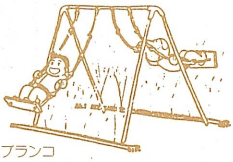
※万一製造不良の点がございましたら，おとりかえいたします。

とーりゃんせ

緑の中にひろがる“水のアスレチック”

定価　33,000円　　8m×2本　特殊軟質塩化ビニール製

水の土俵で
おしくらまんじゅう



噴水ブランコ

流れる滑り台

ホースのスリットから霧状に水をふき上げるので、あたりがソフトで、園児が水に慣れる、水に親しむのに最適な水遊び用品です。
取付設置が簡単なので、自由な使い方ができます。

- 軟質のパイプで、ジョイント部分もゴム製なので、安全な散水装置です。
- 取扱いが非常に簡単なので、女性の方でも設置できて収納も簡単です。
- 配管やノズルなど一切必要としません。それに噴霧状扇形に散水できます。
- ゴミや異物などによる目づまりがありません。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

元気な子どもの室内遊具。

キンダートリムランド®

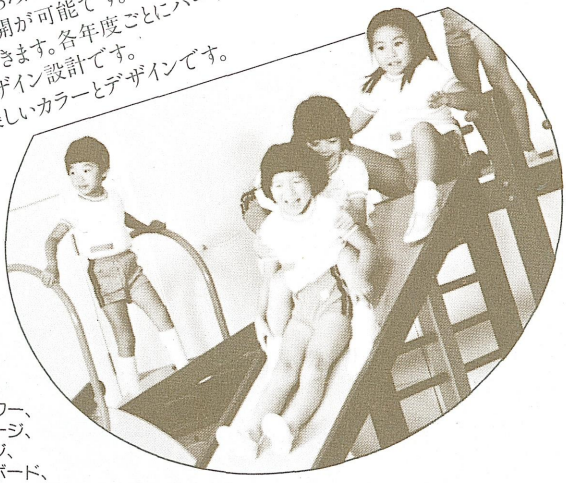
遊びの工夫がいっぱい。子どもの心とからだを育む システム遊具。

単体での遊びから、コンビネーションやサーキットレイアウトなど多彩なバリエーションが可能なシステム遊具です。〈実用新案・意匠登録出願中〉

■特長

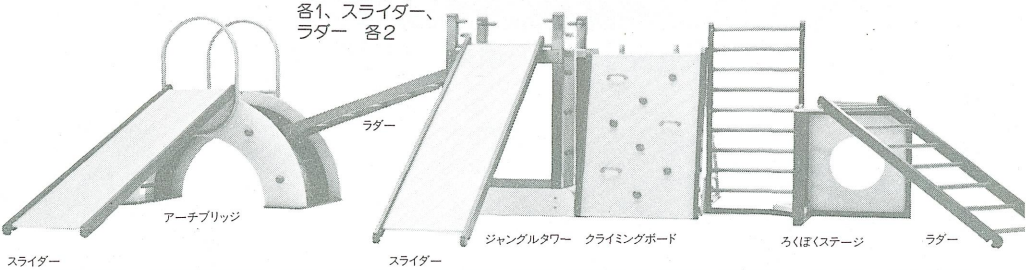
- それぞれの遊具は単体で遊ぶことはもちろん、スライダー（すべり台）やラダー（はしご）を連結したり、別のセットと組み合わせたりして、多様な展開が可能です。
- スペースやご予算に応じた購入ができます。各年度ごとにパーツを追加していく計画購入もできます。
- 耐久性と安全性に十分配慮したデザイン設計です。
- 室内に明るくマッチする、いきいきと楽しいカラーとデザインです。

■生産物賠償責任保険付



総合セット
3025-10 ￥750,000

ジャングルタワー、ろくぼくステージ、アーチブリッジ、クライミングボード、各1、スライダー、ラダー　各2



ジャングルタワー	ろくぼくステージ	アーチブリッジ	クライミングボード	スライダー
3025-01 ￥170,000	3025-02 ￥150,000	3025-03 ￥170,000	3025-04 ￥150,000	3025-05 ￥37,000
●木製　ポリウレタン塗装 ●縦110×横110×高さ145cm	●木製　ポリウレタン塗装 ●縦120×横120×高さ143cm	●木製　ポリウレタン塗装 スチールパイプ　焼付塗装 ●縦90×横180×高さ150cm	●木製　ポリウレタン塗装、スチールパイプ　焼付塗装、ビニロンネット ●縦93×横177×高さ125cm	ラダー 3025-06 ￥23,000

<わしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館